

のデータを用いて、日本域スペクトルモデル (JSM) の相対湿度と発散場を改変する、データ同化手法を開発した。このデータ同化手法は以下の手順からなっている：(1) 通常の客観解析値を用いて JSM の予報を行ない、SSM/I データのデータ同化のためのバックグラウンドデータを作成する。(2) SSM/I で観測された降水域では、相対湿度を気温減率の関数である臨界相対湿度まで増やし、JSM の降水スキームが降水を作るようにする。(3) SSM/I の観測非降水域では、SSM/I 可降水量とバックグラウンドデータの可降水量の差を各レベルの相対湿度の差に分配し、相対湿度を改変する。この分配には、JSM の可降水量の予報誤差と各レベルの相対湿度の予報誤差の統計的相関を利用した。(4) 相対湿度の改変の後に、降水過程を含む非線

形ノーマルモードイニシャルゼイションを行ない、バックグラウンドデータの発散場を調節する。

本研究のデータ同化手法は1988年7月12日21UTCの事例で、降水予報の位置ずれを12時間以上にわたって減少させた(第3図)。データ同化の手順を変えた予報実験の結果は：(1) モデルの降水域かつ観測非降水域では、可降水量のデータ同化がモデル降水域を消すのに有効であった。(2) SSM/I の降水域情報のデータ同化は観測の降水域にモデル降水を作るのに有効であった。(3) 可降水量のデータ同化はまた対流圏下層の相対湿度の予報も改善した。これは、可降水量の予報誤差とこのレベルの相対湿度の予報誤差が高い統計的相関を持っていることが原因である。

---

### 日本気象学会事務局からのお知らせ

学会事務室は881号室(8階)で執務しておりましたが、3月17日(月)に同じ8階の836号室へ移転しましたので、お知らせいたします。

なお、電話・FAX番号には変更ありません。

---